

文化史 19世紀欧米文化史② ～美術史編～

1. [1. 古典主義絵画]

18世紀末～19世紀初、フランスを中心におこった古代ギリシア・ローマを規範とする格調の高い、均整のとれた美術様式。宮廷を中心に発達した。

(1)[2. ダヴィッド]…フランス革命の際にはジャコバン派の一員として「マラーの死」を描いて理性崇拜の演出を担当。ナポレオン時代には宮廷画家として「戴冠式」や「アルプス越え」を描いた。

マラーの死	戴冠式	アルプス越え
		

(2)[3. アングル]

- ・ダヴィッドの弟子。古典主義絵画の完成者とされる。
- ・表作「4. グランド=オダリスク」。(右図)
- ・ゆがめられたプロポーションの後ろから見られるけど面白いポーズの、愛妾を描いている。





2. [5. ロマン主義絵画]

古典主義に満足できず 19世紀初めからおこった美術様式。情熱的・幻想的で、題材も強烈。



(1)[6. ドラクロワ]…フランス=ロマン主義の代表的画家。強烈な色彩による劇的表現を用いた。

①「7. シオ(キオス島)の虐殺」…ギリシア独立戦争を描き、独立運動支援を高め、当時絵画の虐殺とさえ酷評される激しさを表現した。

②「8. 民衆をみちびく自由の女神」…1831年、七月革命の市街戦を描いた。

キオス島の虐殺	民衆をみちびく自由の女神
	

3. 自然主義絵画と写実主義絵画

<p>9. 自然主義絵画</p>	<p>10. 写実主義絵画</p>
<p>古典主義の理想化やロマン主義の誇張を捨てて、ありのままの素朴な自然の姿を描こうとした美術様式。農村や自然の風景を題材にしたものが多い。</p>	<p>現実の自然や人間の生活を客観的に描写しようとする美術様式。19世紀中頃フランスを中心におこり、社会主義運動と接近したものもあった。</p>
<p>①自然主義的芸術作品は、「自然の理想化」と相反するものではない。 ②自然に価値の原理があるとする点においては写実主義（リアリズム）と同意 ③「対象物の理想化を許容せず、美醜にかかわらず自然を写す」という意味での写実主義とは矛盾</p>	
<p>[11. ミレー] 「落穂拾い」</p> 	<p>[12. クールベ] 「石割り」</p> 

4. [13. 印象派]

19世紀後半に現れた光と色彩を重視して、対象から受ける直接的な印象を表現しようとした絵画流派。

<p>14. マネ</p>	<p>15. モネ</p>	<p>16. ルノワール</p>
<p>フランス印象派の創始者。娼婦などを描いて物議を醸しだした。</p>	<p>「光の画家」。『日の出-印象』『睡蓮』、『ラ=ジャポネーズ』などが有名。</p>	<p>豊満な裸婦像などの人物画に独自の境地を拓いた。</p>
<p>『オランピア』</p> 		

5. [17. 後期印象派]

19世紀末に印象派から発展した流派。視覚だけにとどまらず、自然の基本的な形と様式の把握にも努めて、自己の感覚の上で構成しようとした。

<p>18. セザンヌ</p>	<p>20. ゴッガン</p>	<p>21. ゴッホ</p>
<p>自然を単純化した独自の画風</p>	<p>タヒチで未開社会を描く</p>	<p>精神錯乱を起こし自殺</p>
<p>19. りんごのある静物</p>	<p>タヒチの女</p>	<p>22. ひまわり</p>
		